



Title	関係性から見た時間的連続性についての考察 : 心理療法における時間と他者
Author(s)	村田, 直子
Citation	大阪大学教育学年報. 2009, 14, p. 51-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関係性から見た時間的連続性についての考察

—心理療法における時間と他者—

村 田 直 子

【要旨】

本研究では、我々が普段体験している時間の構造を改めて見つめ直し、より本来的な時間の様態を臨床心理学的な観点から探った。時間の経過を感じることは、時間の中で一貫して“私”を保ち続けることは一体どのようなことなのか。これらの問いに対して、時間的連続性の概念を用いて接近を試みた。そこで得られた結論は、他者の存在が自己の時間に深い関わりを持つという事実である。例えば、Winnicottの理論に見られるように、母親の存在は子の時間の発生に大きな貢献を果たす。他者と安定した愛着の絆を結ぶこと、それは他者と時間を共有し、かつ自己を連続的な存在としてあらしめていくことといえる。また時間的展望の研究からも、時間的展望をしっかりと持っている青年は、友人と親密な関係を築けていることが指摘されている。

心理療法の役割の一つに、クライアントの人生上の断片的な出来事を“今・ここ”に集約していくという側面がある。そしてそれもまた、クライアントとセラピストの関係性に依拠してなされていく作業である。両者のめぐりあいによって時間が創発され、そこから時間的連続性を共に紡ぐことが、クライアントの変容過程を支える一因といえることができるのである。

1、はじめに

筆者はこれまで人間存在と時間についての研究を、特に時間的連続性の概念に焦点を当てて行ってきた(村田 2003, 2005, 2007)。時間的連続性とは一般に、自分の過去・現在・未来がつながっているという実感と定義されているが(河野, 2003)、筆者は時間的展望という発達の側面からの研究と、各種精神疾患の時間という病理的側面からの研究の両方を概観した上でもう一步進め、「過去・現在・未来の重みが個人の中でほどよく統合されており、個人が昨日までの自己をしっかりと引き受け、未来を志向しつつも現在を主体的に生きる状態」(村田, 2003)と一応定式化した。本研究では、この時間的連続性の発達・構築・回復等に際し、他者の存在がどのような役割を果たすのかということについて検討を試みたいと思う。

臨床心理学的援助を求めて来談するクライアントの多くは、周囲の特定の人々、あるいは他者イメージそのものに対し、関係性の障害を抱えている。同時に彼らにおいては、過去・現在・未来の見通しや連続性が断片的で、例えばトラウマにおけるフラッシュバックや(西澤, 1999)うつ病における未来の遮断(Geb-sattel, 1928)、統合失調症者の未来の先取り(木村, 1982)等、特定の時間次元への固着が見られることもある。こうした事実を踏まえ、個人における時間と他者の発生の起源をその人生早期に遡りつつ、心理療法における関係性がどのような時間を現出せしめるかということについて、種々の知見をまとめていきたいと思う。

2、自己と時間—その文化的背景と原初形態—

“時間は流れる”というのが、我々現代人にとってもっともナチュラルな感覚である。そして一般にその流れは急転や遅滞することなく、ごく正確に淡々と進むものと考えられている。周知のとおり、この客観性は時間が空間化されたモデルで捉えられていることによる。つまり昨日一日の長さは今日一日の長さと同値であり、今から一時間後は今から一時間前と同じ幅を持つという我々に馴染み深いリニアモデルである。ただ留意すべきは、このリニア的時間は、我々にとって完全に外在化されたものであるということである。この種の時間は、我々の主観的な苦痛や幸福感、あるいは退屈や熱中には一切影響を受けず、人

間的な営みから明らかに切り離された超越的なインジケーター機能を負っている。しかしながら真木(1981)によると、この時間モデルは近代社会になってから形成された比較的新しいものであるという。背景として民主主義による自由・平等の精神や、貨幣経済の発達等、様々な要因が推測されるが、その結果として、我々は他者から遠く隔たれてしまったように思われる。論理的で明快な時間は過去の方にも未来の方にも無限大に伸びており、我々は自分の人生を硬質な線分イメージでしか把握することができない。そして我々はいつの間にか、他者と自然な心の交流をすることなしに、この超越した(と仮想されている)機能に、ごく個人的にアクセスしながら日々の自らの行動や感情を統制するようになった。量化された時計時間と自らの営みの往復に絶えず駆られているというよいこの現状は、一方で明らかに他者の存在からも自分自身の実感からも疎外されており、他方では“この一年を無駄にした”“他人と比べて前進していない気がする”という奇妙な切迫感を生みもする。つまり、万人が世界標準時の刻みに合わせて個々に行動をしているような錯覚すら起こすのである。

一方、歴史的に直線的時間モデルに先行するのが円環的時間モデルであるが(中村, 1980)、この時代には集団内で農耕や牧畜のプロセスに基づく時間観が共有されており、人々の諸行動はそれに契機づけられていたといえる。つまり集団レベルではある程度時間は内在化されており、人々はその共同体の時間を、抵抗なく自分のものとして享受していた可能性がある。また、輪のように一巡しては繰り返される時間構造によって、そこでは世代の更新という通常破壊や混乱を招くような事態も、難なく包含していくことができよう。このように反復という制約あるいは守りによって、円環的時間モデルにはある種の凝集力が備わっていると仮定できるのではないだろうか。ただこれはあくまでもパブリックな時間の萌芽という意味であり、個としての人間の姿は浮かび上がってこない。共同体の時間とは異なるごくプライベートな時間への配慮、つまり一人の人間が生まれて死んでいくことへの微細な視線が、ここには欠落しているように思われる。

さて、上述した二種類はいずれも代表的な人工の時間モデルであり、換言するならば、人間の意識が作り上げた幻像としての時間であるといつてよい。それならば意識発生以前に我々が体験した時間とは一体どのようなものであったのだろうか。これについて母子関係理論から間接的にはあるが接近を試みたいと思う。

真木(1981)は、時間の原初形態は“交代”であると述べる。“交代”とはこの場合、二つの契機が入れ替わり反復することを指す。この事態を、全体性が裂開し、差異が表出し、変化が読み取られていくこととするならば、我々はすでにこれを人生最早期に体験していた可能性がある。Winnicott(訳書, 1977)は、時間は母親が受け持つ代理的な自我機能の一つであるとし、これによって幼児は「最初のうちは短い持続時間をもつにすぎないとはいえ、独自の時間感覚をもつに至る」(Winnicott訳書 1977, 85頁)と述べている。当初、ユニットという相即状態から、養育者による適切な関わり、中でも、乳児であれ子には主体があり自我がきちんとあるという「母の想定 (assumption)」(内海 2005, 71頁)を得て、我々は快と不快に代表される“交代”を体験的に内化していく。不快は相即状態が妨げられること、つまり空腹や排泄という生体リズムの一次的变化に応じて、養育者がどのタイミングでそれに関わるかという二重の時間構造が絡み合い、ズレが生起する状態といえるが、このズレを共に生き、抱えてくれる養育者の存在によって、赤ん坊は「連続的な生の営み (Continuity of Going-on-being)」(Winnicott訳書 1977, 63頁)を獲得していくことができるといえる。斎藤(2007)は、乳児にとって母親の不在は安心感の剥奪につながるものの、再び母親の在を体験することが心身の平衡と大きな安堵をもたらすとし、「生活の中で不可避なこの両極の行き来は、子どもにとり厳しい現実でありながらも、むしろ“雨降って地固まる”のように、『基本的信頼感』の感覚はより確実化し定着の方向に向かう」(斎藤 2007, 274頁)と述べる。この指摘もまた、安心と不安、緊張と弛緩といったような、起伏を生き抜くという意味で、時間的連続性の芽生えに至らしめる関係性に言及しよう。

このように我々の時間の原初形態は、時計時間の登場を待たずして、他者や環境との交流の中で生き生きと体験されていたといえる。推移・変化・間合い・ズレといった相互作用ならではの現象によって、我々は自分を自分として他者から差異化すると同時に、自分自身が連続的に存在しているという感覚を抱くようになる。それは自らのうちに時間を孕んでいる、あるいは時間の中にまさに存在させられているという

感覚であり、極言すると、刻一刻、自分自身が実現していくことが、そのまま同時に時間や世界が発生していくような実感であるといえる。逆に述べるならば、このように時計時間に先行する内的な時間が存在しないことには、現実的な日常場面で、自分の思考や感情を一貫させたり、前後関係から他者の意図を推測したりする機能がうまく働かないと考えられる。したがって、この内的な時間を丁寧に体験しておくことが後々の発達を考えた際に非常に重要であるし、心理療法で目指されるべき関係性でもあると思われる。

従来、宗教・哲学領域で述べられているように、我々は生まれた時点で「死へ臨む存在」(Heidegger 訳書, 1963)であり、「有はみな時なり(存在は時間である)」(道元)という事態を生かされている。また、そもそも遺伝子レベルで生命という名の有限の時間がプログラム化されており、いわば宿命として時間性を担わせられているといえる。しかしながら、見方によっては非常に孤独とともれるこの生命活動を支えてくれるのが関係性であるといえ、我々は日々、他者との相互作用の中でも自己の時間的展開を描き続けている。「向かい合いの状況は、時間の実現そのものである」(Lévinas 訳書 1986, 73頁)と表されるように、他者との関係性には、先述の間合いやズレに潜在して、現在において双方の未来や過去をも含んでしまうような激しいダイナミズムが蠢いているのだといえる。なぜなら我々は何も現在という瞬間の断面に立って他者を見ているのではなく、その他者の過去の行動や未来の出来事に様々なファンタジーを抱きながら相対しているはずだからである。木田(2001)は、人間は現在のみ生きるのではなく、現在・未来・過去の間に複雑なフィードバック・システムを設定してそれにまたがって生きるものであると述べているが、筆者はこのフィードバック・システムはおそらく他者を手がかりにした場合にもっとも鮮烈な形で浮上するものではないかと考える。つまり、他者という対象に時間を投影することそのものが自己の時間的展開につながるのではないかということである。以下で論じていくのは、このような他者を通過させることで形成されたより本来的な時間についてであり、関係性の深化に伴って個人の時間的連続性が発達していく可能性を探っていくことを試みたい。

3、他者との間で生成される時間

本節では、時間的展望研究と、愛着研究という二つの異なった発達に関する知見を参考に、個人の時間的連続性が他者を手がかりにどのように発達するかを検討したいと思う。時間的展望の機能の一つには、他者と目標を共有して行動を起こすという共同化機能があるが、従来の時間的展望研究は個人内の心理的な成熟に焦点を当てたものが多く、他者との関係性との関連で検討されることはほとんどなかったといえる。また愛着研究においても、重要な他者との関係性の成熟や病理が、個人内においてその後どのような認知・思考・情動等に影響しうのかという臨床的観点の重要性が改めて問題にされているところである(遠藤, 2007)。こうした現状に加え、上述してきたように、個人の病理は時間の歪みとして捉えることが可能である一方で、その時間の起源は人生最早期に重要な他者との体験にまで遡ることができるという側面がある。これらを踏まえ、以下では時間と他者という広汎な各概念間の接点を探るべく、時間的展望研究と愛着研究のそれぞれから知見を借りて試論を繰り広げてみたいと思う。

3-1 時間的展望研究から

時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin 訳書 1979, 86頁)とされ、いわゆる時間的な見通しであると考えられる。Erikson (訳書, 1973)は、青年期に考慮すべき心理・社会的課題としてこの時間的展望の確立を挙げており、遠藤(1981)も青年が過去と未来を調整し、未来の可能性を現在の可能性と統合する必要性を説いている。このように、時間的展望は自我同一性の問題と重ねて考えた際には特に、これまでの自己のあり方を再考した上で未来を描いていくという意味で、時間的連続性に裏打ちされていなければならないと推察することができる。現に、非行少年は現在と切り離して未来を明るく考える傾向や(白井, 2001)、一般少年の方が将来を真剣に考えるあまり不安も高まること(小宮山他, 1966)、子どもが現在を過去の結果と考えたり、未来を現在生

きていくために意識的に使っていくことができないこと(小宮山, 1977)等を考え合わせると、尾崎(1999)の洞察のとおり、展望の内容からそのまま現在の個人のあり方を判断することは困難であるし、言葉を変えると、時間的展望を云々する前に、時間的連続性がきちんと形成されているかどうかを検討しないことには、とりわけ臨床的にはほとんど意味がないといえる。したがって、時間的展望を論じる際には、まず時間的連続性の概念がそれに先行して存在する必要性を強調しておきたい。

さて、この時間的展望の概念であるが、白井(1997)によって、次の三つの機能が示されている。それらは、①動機づけ機能、②人格的機能、③共同化機能である。①は、未来において実現したい事柄や、逆境を乗り越えることができた過去の成功体験を思い描くと、現在において努力が可能になるといった機能を指しているものであり、②は、自身が生まれてきたという事実から死の可能性に至るまでの一切を引き受けることで、現在における実存的生に気づくという機能であるといえることができる。また③は、他者と時間的展望を共有するということであり、その意義は人々を結びつけることにある(白井, 2001)。そして従来、これら①、②の機能については活発な議論が交わされてきた。①に関しては、期待理論を用いて適応との関連を探究した杉山(1994)の研究や、未来にしっかりと志向性を持つ青年ほどポジティブな達成動機を持つと示した研究(Gjesme, 1979; Teahan, 1958)をはじめ、展望や目標を持つことがそこに至るまでの努力を喚起し、現在の生活に充実感を与えるという側面が明らかにされている。②に関しては、自分の未来への態度が肯定的な者ほど、積極性や実存感等の自己評価が高く、時間的展望もまた肯定的であるという研究(榎本, 2001)や、生きがい感と時間的展望の間には正の関連があるとする研究(都筑, 1984)、実存不安の観点から時間的展望を検討した研究(吉田・小熊, 1988)等が存在し、現在に過去や未来を含んで生きていくことは、人格の成熟と密接に関係しているようである。ところが、③の共同化機能に関する研究はほとんど見当たらず、国内の時間的展望研究を精査した都筑(1993)の論文にも、そもそも他者との関係性を論じたものは、対人不安との関連が検討されている研究(勝俣, 1992)や、過去・現在・未来における家族イメージを扱った研究(五十嵐, 1989)がわずかに存在するのみである。しかしながらその後柏尾(1998a, 1998b)が、従来の時間的展望が特に動機づけの側面に傾いていた点を指摘し、対人関係について検討する重要性を説き始めている。それによると、「将来に対して目標を抱き、そのことへの準備も為し、今の行動が将来へつなげるだろうという自信を有している者ほど、心を打ち明けたり、真剣な議論を行なうという他者とは距離を置かない親密な交友関係を志向している。またそのような彼らは、現在の生活に充実感や満足感をもっており、これまでの過去を振り返って見た場合、それを肯定的に捉えている」(柏尾 1998a, 68頁)とのことである。これは共同化機能そのものについての研究ではないが、他者となつがった現在において過去や未来を眺めるという複雑で有機的なネットワークのありようが新たに提起されているといえ、今後さらに必要となってくる視点であると思われる。

個人内の過去・現在・未来の時間的連続性に焦点を当てていく作業はもちろん重要である。しかしながら、他者との関係性を含めた上でそれらを考えていくことによって、また異なった視点が獲得されるのではないと思われる。例えば白井(2001)は、ナチス政権下、シオニストたちが迫害にめげずに行動を遂行できた理由として、民族の過去への誇りと祖国の建国という未来が仲間の間で共有されていたからだという。これらを考え合わせると、関係性に基づいて、時間的展望の萌芽が生じるといったこともありうる。いえ、刻一刻と同じリアリティで共に生きてくれる他者の存在によって、自らを歴史的連続体として認識していくことが可能になるといえる。次項ではこの視点に立って、愛着理論を見ていくことにしたい。

3-2 愛着理論から

愛着(attachment)はBowlbyによって最初に提示された概念であり、一般的には母子の情愛の絆を指していわれることが多いが、原義は、個体がある危機に遭遇した際に特定の他個体への近接を通して、安全の感覚を回復・維持しようとする傾性とされる(遠藤, 2007)。そして不安を低減させる他個体への近接は、それを安全基地として利用したさらなる探索を可能にするといえる。また愛着は、人生早期に養育者との相互交流の中で形成されるが、単にその時期で完結するのではなく、生涯にわたってその時々的重要な対象に対して抱かれ続けるといわれている。くつつく(attach)ことによって蓄積された経験から、自己や他

者、あるいは関係性一般に対して、主観的な確信やイメージが形成されるのであり、内的作業モデル (internal working model) と称されるそれは、一生涯機能し続けるという (遠藤, 2007)。このような愛着研究は、従来発達心理学の分野で実証的に行われており、体系的で膨大な理論的背景を有しているが、本研究では最近特に注目されている臨床領域との関連の部分に焦点を当てたいと思う。

愛着が人生を通じて、対象を変えながらも永続するものであることは先に述べたが、理論的には以下の四つの愛着タイプが存在するといわれている。一つ目は、常時養育者と距離を取りがちな回避型、二つ目は養育者の在・不在に応じて悲しんだり喜んだり適切な情動を表現できる安定型、三つ目は養育者との分離に激しい苦痛を訴え、再会した後も感情を調節できないアンビバレント型、四つ目は上記のいずれにも分類できない、矛盾と混乱に満ちた無秩序・無方向型である。そして長じて後も、これらの分類に対応して、①アタッチメント軽視型、②安定自律型、③とらわれ型、④未解決型という形で成人の愛着タイプが存在するといわれている (Main et al., 1985)。近年、精神病理をアタッチメントの枠組みで捉え直す試みが活発であるが、数々の研究に一貫している結果は、臨床群における②安定自律型の少なさと、④未解決型の多さであるという (北川, 2007)。北川 (2007) によると、未解決型の原型とされる無秩序・無方向型というのは、回避型やアンビバレント型が苦痛を扱う方略が防衛的に組織化されているのに対して、秩序だった防衛方略さえ築けない未組織タイプゆえ、病理との関連も深いとのことである。そしてこのタイプの対になる養育者の傾向としては、精神的に不安定で言動に突発的に変調をきたし、常に子を脅えさせるようなタイプや、ストレスにきわめて脆弱で無力感にとらわれ、情緒的にひきこもりやすいタイプが想定されている (遠藤, 2007)。

これを時間性の文脈で読み替えてみると、予測の立たない養育者の振る舞いや、突如生じる緊張や恐怖を生じさせる体験の繰り返し、あるいは何が引き金になるかわからない養育者の無力化と、回復のめど立たなさ、子の時間的展望の育成を阻む一つの大きな原因となりえるだろう。子は制御不可能な事態に対して、上述のとおり一貫した防衛方略を持たないゆえ、結果としての言動は散漫なものとなり、子自身の時間的連続性も細切れで断続的にならざるをえない。無秩序・無方向型の養育者の極端な例として虐待者が挙げられるが、事実、慢性的な虐待を受けた子どもは、怒ったかと思えば甘える等、感情面の一貫性が見られないといわれているし (西澤, 1999)、「その場その場であり様がコロコロと変わり一連の時間軸のなかに身を置けない」(四方・増沢, 2001) というように人格の中核に達するほど深刻な断片化が起こることもある。こうしたケースでは、過去の体験は、消化されずに異物のまま残り、その後もフラッシュバックとして鮮明に体験されるといわれており (西澤, 1999)、それゆえ、現在にリアリティを感じ、未来へとエネルギーを向けるといった時間の中で自己を有機的に組織化していくことはきわめて難しくなる。第二節で見たように、養育者の抱える作業によってこそ、子には連続的な時間が流れるのであり、「育児が適切でないと存在の連続性を欠くために、幼児は真の意味での存在とはならない。その代わり環境からの侵害に対する反応に根ざした人格をつくりあげる」(Winnicott 訳書 1977, 55頁) ということになってしまうのである。こうした示唆を総合すると、他者との安定した絆が存在しない限り、生き生きとした豊かな時間は得られないといっても過言ではないだろう。

しかしながら、一度形成されてしまった愛着のタイプが、終生変わらないものであるかという点、そうとは言い切れないようである。人生の途上、何らかの要因によって、愛着のタイプが安定型に向かうという、いわゆる獲得安定型が存在するものもまた事実である。Crowell et al. (2002) によると、結婚の前後で愛着のタイプが不安定型⁽¹⁾から安定型に移行するケースが少なくなく、また結婚の際に選ばれるパートナーも、同型選択が全体の42%であることが示されている。この研究結果から明らかとなったのは、たとえ養育者との愛着関係が望ましいものでなくても、その後の人生で出会った重要な他者によって新たに内的作業モデルが活性化され、自己や他者に対する表象が変化する可能性があること、自分と異なった愛着タイプのパートナーと、結婚という親密な関係性を維持できる人が全体の半数以上いることである。ここから想定されるもっとも理想的なケースは、不安定型の人が安定型のパートナーを得、それを補助自我的⁽²⁾に利用しつつ、人格の安定化を図っていくというものであろう。その一つとして、愛着の絆を基盤にしながら二人分の視野で過去や未来や現在を眺めていく行為も挙げられるといえる。

愛着の安定性と人格との関連は、自我同一性との関連でよく検討されている。思春期・青年期を対象と

した研究からは、自我同一性の確立と安定型の愛着タイプにはポジティブな関係があることが報告されており (Reich & Siegel, 2002; Zimmermann & Becker-Stoll, 2002)、また老年期を対象とした研究からは、過去・現在・未来のつながりが良い者ほど安定型の愛着タイプを有しているという報告がなされている (Kazakina, 1999)。このことから、愛着タイプが安定型である人は、時間的展望および時間的連続性の確立がなされていることが推測できるが、結婚を機に安定型に移行した人々もまた、重要な他者との関係性に根付いた、新しく充実した時間を展開できる可能性があるといえる。重要な他者との出会いについて木田 (2001) は、「自分の過去の体験が、採りあげ直され (反復され)、すべてがこの特権的瞬間を目指して進行してきたかのように意味を与え直され再構造化される」(木田 2001, 36頁) とし、めぐりあいが自己の歴史の再編をもたらす可能性を述べているが、ここまで鮮烈な体験でなくても、例えば結婚のように社会的にも私的にも他者との共同作業が求められる関係性になると、“他者と共にいる現在” という自己の立ち位置が強調されるがゆえに、具体的な未来展望を共有したり、自らの来し方を再考したりする機会が自然と生じるものと思われる。したがって青年期以降もまた、パートナーと人生を共有する感覚や実際の協同作業といった安定した絆が足がかりとなり、時間的連続性が発達していく可能性は大いにあるといえる。

一方個人内に視点を戻すと、先ほどの知見から、安定型の愛着タイプ、ひいては安定した人格は同時に成熟した時間性と密接な関連があると結論づけることができよう。これに加えて、Winnicott (訳書, 1977) の説く母親の時間産出機能を考え合わせると、母親の時間性は確実に子の時間性に大きな影響を及ぼし、母親自身が安定していれば、それに依拠して子の時間は生き生きと豊かに展開されるという当然の帰結がもたらされる。ここから導き出される一つの仮説は、人生上、重要な他者の時間性は、おそらくそれが早期であればあるほど、関係性が深ければ深いほど、自己の時間性に強い痕跡を残すというものである。つまり時間は、母親から子に確実に“うつる”といえるのである。もっとも悲劇的なケースは、未来に何ら希望を見出せず、過去の辛い体験に苛まれ、空疎な現在に封鎖されている母親の子は、世界を同様の時間性でしか体験できないということになる。しかしながら先述したように、長じて後、新たな対象との遭遇によって、それはいくらか可変なものでもあるので、特に臨床実践の際にはこうした可能性にかすかな期待を抱きながら、クライアントと出会っていく必要がある。

4、心理療法における時間と他者

以上を踏まえて、本節では治療関係というある種特異な人間関係において、時間と他者のテーマがどのように浮き彫りとなるか、最終的な考察を深めていきたい。

4-1 やりとりの中で生まれるカイロス

河合 (1967) は、クロノス (chronos) とカイロス (kairos) という二種類の時間について、心理療法の枠組みで論じている。一般的にクロノスとは計測可能な時計時間を、カイロスとは運命的な“時”を指していわれることが多いが、河合 (1967) はこのカイロスの重要性について、自己実現の問題と絡めながら次のように書いている。「(仕事にばかり熱中してきた人が) ふと幼児の記憶を心に浮かべて、それを何とかしてみたいと思う“時”、(中略) 手も顔もよごして遊びに熱中していた子供が、初めて自発的に手を洗い、治療者からハンカチを受け取る“時”、それは治療者の予想を超えて、生じてくるものである」(河合 1967, 239頁)。平素、我々はクロノスにばかり支配され、大切な本物の“時”が我が身に降りる瞬間を見失いがちであり、また現代社会におけるストレスの問題は、クロノスの病とも呼ぶことができるかもしれない。河合 (1967) の論は、こうした背景を前提とし、自己実現の場としての心理療法において、カイロスが生気を帯びることの重要性を示唆しているといえる。その場合、クライアントとセラピストの関係性において、具体的にそれはどのように現れてくるのであろうか。

繰り返し述べているように、他者と相対したときのズレや間合いが時間の流れを体感する契機となること、そして、他者は過去や未来といった時間的なふくらみを投影される存在となることは、二者の間で実現される関係性の一形態であるといえる。そしてこの種の時間は決して時計時間に基づいたものではなく、

例えば片方が微笑した際に、もう片方がつい微笑をもらしてしまうというような、そのタイムラグそのものが時の経過と感じられるような、関係性に依拠して創造される時間のことである。クライアントの身の上に生じていることを、クライアント自身のものとしてリアルに体験させていくために、換言すると、クライアントの断片化した時間が組織化していくためには、セラピストは両者の関係性を器としつつ、このようなズレ・間合いを効果的に用いていく必要がある。ただし、心理療法を訪れるクライアントの多くは関係性の障害を抱えており、ただちにセラピストに時間を読み込んでいけるかという点、それはきわめて難しい問題となる。代表的なところでいくと、境界性人格障害の場合、同一の対象に対して理想化とこき下ろしという両極の捉え方が瞬時に入れ替わって表現されるように、他者に対する表象が心の中で連続的に保持されないという状態から、心理療法を始めないといけない。こういった重篤なケースになると、まずは心理療法の枠（曜日や場所、開始時刻や終了時刻、料金等の現実的な契約）を守れるか否か、守れるようになるにはどうしたらよいかといった、むしろクロノスの回復を糸口にしていく必要がある。時計時間という、世界を律し人々を動かす構造にアクセスしようとすることによって、たとえそれが外在的なものであっても、行動や思考といった側面から自己に刻みが入ることになる。時計時間というインジケーター機能は、超越的である一方、世を貫くものであり、他者とのつながりを見失い、自己の深みに落ちているクライアントにとって、さほど侵入的でない形で共同体や他者の存在を暗示するものといえる。そしてクロノスがある程度復活し、面接構造が安定してくる頃、ようやくセラピストとの関係性は深化し、カイロスの素地となるような、両者が向かい合うことで実現する時間というものの存在がテーマとなってくる。

自分との面接以外の時間を、セラピストがどのような予定で過ごしているかを気にしたり、自分の発言に次いでセラピストがどのようなタイミングで表情や仕草、言葉を生成するのかということに過敏になったり、クライアントの時間はセラピストを通過させることで徐々に連続化し始める。そしてそのためにはセラピストの側も、各回のクライアントとのやりとりを自らの記憶の中に保存したり、前回の内容を翌回に扱ったりと、断片的に散りばめられた素材をつなぎ、両者の相互作用の本質からじっと目を逸らさずにいる必要がある。こうした際のセラピストには、第二節で見たような、時間を産出する機能が担わされているといえ、それにはセラピスト自身が時間的に連続した、1人の生きた人間であるという点が大前提となってくる。そして心理療法が非常にポジティブに運ぶ場合には、「内的な良い関係が確立し、それがこわされないと（しばらくのあいだは幾分なりとも）、個人は現在と未来に対し自信を持つことを保証される」（Winnicott訳書 1977, 25頁）という言葉のとおり、クライアントは積極的に未来を展望し、現在の生活に実感を抱くようになる。あるいは、クライアントの悲惨な現状は何一つ変わらなくても、過去を悔やみ、未来を案じ、現在を苦しむという、自己の人生の各局面をもがきながら往復する中で、その営みにそっとまなざしを注ぐセラピストの存在によって、時間的連続性が形成されていく場合もある。というのも、ここで語られる過去や現在や未来は、個人内ですでに表象として冷え固まったそれらではなく、両者の関係性に基づいて今まさに産出される、リアルに息づく過去であり未来であり現在であるからである。他者とのつながりながら、刻一刻と実現されるそのような時間はもはや、存在していることと表裏一体をなすほど根源的であるといえ、それは実感を織り交ぜながら自己の歴史を紡いでいく作業の端緒となりえる。

4-2 異質なものを接ぎ合わせていくこと

上記のような観点から考えた場合、時間的連続性の形成は、単に過去の記憶や未来への展望を現在の自己にひきつけて組み込んでいくという単純なことではない。つまり自己の中でのみ達成されるような単なる発達課題のようなものではなく、他者に開かれつつ、一方で自己存在の根幹に深く関わるような、いわば心理療法が真っ向から取り組まねばならない問題と考えることができる。かつて筆者は心理療法における時間的連続性について、「クライアント個人の時間的連続性を客観的に眺め、その縦のつながりが回復するように働きかけていくだけでは不十分であり、（セラピストと共に）協同して同じ時間的連続性を育ていけるかということも問われてくる」（村田 2007, 61頁）と述べたが、これはクライアントにとってもセラピストにとっても心理療法での協同作業が、自己にとっての新しい時間の誕生となりえるという意味で

ある。そして面接中、一瞬ごとに更新されゆく時間の局面に相手の姿を見出すとき、我々がかつて人生のどこかで体験した、懐かしい温かみ―それはもはや個人的な体験に根ざすものというより集合的無意識⁽³⁾レベルに属するものかもしれないが―を体験することになるのである。統合失調症者に対して治療的接近を試みたSchwing (訳書, 1966) の“母なるもの”を大切に作る姿勢も、おそらくは1人の人間が1人の人間に出会い、相手の時に自分の時を重ねるというごく素朴な関係性から出発しているのではないかと思われる。患者はSchwingの関わりやSchwingの存在そのものを手がかりに、自閉的な時間から生き生きとした時間への移行を見せるのである。それは具体的には、治療者と意味ある言葉や仕草、沈黙をやりとりするという中で実現される。

心理療法という名のもと、セラピストが臨床心理学的援助をクライアントに施すという外観を取りつつも、本質的な意味では、共に取り組んでいるのは存在と時間の根本的問題である。そして、冒頭でも用いた、「向かい合いの状況は、時間の実現そのものである」(Lévinas訳書 1986, 73頁)という言葉が端的に示すように、二者のめぐりあいは時間の創発につながる。その関係性が深ければ深いほど、両者の存在によって創られた現在という時間は、単なる瞬間ではなく、過去も未来も含む、様々な方向へエネルギーのベクトルが交錯するような実りあるカイロスとなりえるであろう。河合 (1967) のいうように、「手も顔もよごして遊びに熱中していた子供が、初めて自発的に手を洗い、治療者からハンカチを受け取る“時”」(河合 1967, 239頁)、また、セラピストがクライアントの語りに実感が持てた瞬間、あるいは激しいやりとりが途絶え沈黙が訪れたそのとき、過去も未来も自己も他者も渾然一体となり、ただこの現在が痛烈なくらいの生々しさに襲ってくることもある。この、突如訪れる「純粹経験」(西田 1950, 13頁)と呼ぶべき出来事は、上記の場合、真の関係性を源泉として出現するといえる。純粹経験について、続けて西田 (1950) は「前の作用が自ら後者を惹起しその間に思惟を入れるべき少しの亀裂もない」(西田 1950, 16頁)、「現在はいつでも大なる体系の一部と見ることが出来る」(西田 1950, 22頁)と、現在が形を変えて連続していくさまに言及している。それは、直線的時間のように互いに等質な瞬間と瞬間を結んで連続性とするのではなく、西田 (1950) が挙げる、崖を上る身体の働きや、音楽家が熟達した曲を奏でる行為等の、一連の流れのイメージに表されるように、異質な要素が意味深くタイトに結ばれ、結果、まるで突沸するように連続性が現れる事態を指している。これをマクロな視点に置き換えると、1人の人間の個人史もまた、トラウマティックな忘れられない思い出や、強迫的な未来への憧れ、味気のない今の生活、そして今回論じた他者との関係性をはじめ、雑多で矛盾がいつぱいの素材に彩られている。おそらく心理療法で行われる究極的な作業は、一見ばらばらなこれらを、セラピストとの関係性を基軸に、互いに連関させながら“今・ここ”に集約していくことであろう。そしてその際、セラピストの側にも少なからず同様の状況が生じていることを忘れてはならない。自己と他者、死と生、過去・現在・未来という諸要素が、「切り離せない含みあい」(檜垣 2005, 61頁)を持ち、「異質な連続性としての多様体」(同頁)を呈するというこの世の根源的なありかたが垣間見えるのが、磁場として心理療法が機能した瞬間であるといえよう。

5、おわりに

誕生することは、ただちに時間を担わされることである。その一方で、他者とめぐりあうことは、互いの時間的制約の中で実現された稀有なことといえる。臨床心理学が生きたリアルな人間についての学問であり、心理療法が生きづらさに寄り添う仕事である限り、時間というテーマは、もっと積極的に語られるべきであると筆者は考える。一般に、時間の経過を認識できるようになるのは、学童期であると思われるが、おそらく体感レベルではもっと早期から時間を把握できているはずである。それはやはり他者の存在が大きな要因であろう。

時間を“うつす”役割を持つ者として、時間的なふくらみを投影される対象として、時間的連続性を共に紡ぐ相手として等々、他者がいることの意味は多岐にわたるが、いずれにせよ、めぐりあいは時間を創発する。そしてそれは、双方の限りある生命活動が続くうちにおいてであるということ、決して忘れてはならない。「和声法が意味深い方向性をもって終止和音へと収斂しうするためには、個々の和音はいわば音楽の背後に拡がっている沈黙の空間の動きによって支えられていなくてはならない。それと同じように、

われわれの生が豊かな死を意味深く準備しうするためには、生の一瞬一瞬が絶対の死によって絶えず担われていなくてはならない」(木村 2001, 162頁)。死までを含んだ時間的連続性を紡ぐためには、どれだけ具体的に日常に根ざした臨床心理学的援助を行う場合においても、これらの真実を心に留めておく必要があると筆者は考える。

【注】

- (1) 安定型以外の三つの愛着タイプを総称して不安定型と呼ぶことがある。
- (2) 補助自我とは、サイコドラマにおいて主役が演技しやすいように自発性を引き出す役割を果たす存在である。ここでは、パートナーが活動しやすいよう、臨機応変にサポートを入れる存在の意で用いている。
- (3) Jung, C.G. の概念で、文化や時代を問わずに人間の心に普遍的に存在する無意識領域とされる。

<引用文献>

- Crowell, J.A., Treboux, D., Gao, Y., Fyffe, C., Pan, H., Waters, E. 2002 "Assessing secure base behavior in adulthood: Development of a measure, links to adult attachment representations and relations to couples' communication and reports of relationships", Developmental Psychology, Vol.38, pp.679-693.
- 道元 『道元 上 日本思想体系12』 寺田透・水野弥穂子 岩波書店 1970
- Erikson, E.H. 1959 "Identity and the Life Cycle" Psychological Issues vol.1 No.1 monograph1, International University Press, New York. 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房 1973
- 遠藤辰雄 1981『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版
- 遠藤利彦 2007「アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する」数井みゆき・遠藤利彦編著『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房 1-58頁
- 榎本博明 2001「自分の未来への態度」『日本発達心理学会第12回大会発表論文集』159頁
- Gebattel, V.E.v. 1928 "Zeitbezogenes Zwangsdenken in der Merancholie" Prolegomena zu einer medizinischen Anthropologie, Springer, Berlin. 1954
- Gjesme, T. 1979 "future time orientation as a function of achievement motives, ability, delay of gratification, and sex" The Journal of Psychology, Vol.101, pp.173-188.
- Heidegger, M. 1927 Sein und Zeit, 細谷貞雄・亀井裕・船橋弘訳『存在と時間』理想社 1963
- 檜垣立哉 2005『西田幾多郎の生命哲学 ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』講談社
- 五十嵐敦 1989「青年期の家族展望 家族についての時間的展望」『家族心理学年報』7, 197-216頁
- 柏尾真津子 1998a「青年期における時間的展望と対人志向性との関連」『関西大学大学院人間科学』48, 57-70頁
- 柏尾真津子 1998b「青年の友人関係と時間的展望との関連」『関西大学大学院 人間科学』49, 139-149頁
- 勝俣映史 1992「対人恐怖を訴える女子新入社員の時間的展望テスト(TPT)所見」『日本教育心理学会第34回総会発表論文集』428
- 河合隼雄 1967『ユング心理学入門』培風館
- Kazakina, E. 1999 Time perspective of older adults: "Relationships to attachment style, psychological well-being, and psychological distress", Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering, Vol.60, No.1-B, pp.0368.
- 木田元 2001『偶然性と運命』岩波書店
- 木村敏 1982『時間と自己』中央公論社
- 木村敏 2001『木村敏著作集8 形なきものの形を求めて』弘文堂
- 北川恵 2007「精神病理とアタッチメントとの関連」数井みゆき・遠藤利彦編著『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房 102-130頁
- 小宮山要・松本恒之・渥美玲子 1966「非行少年の意識態度に関する研究」『科学警察研究所報告(防犯少年編)』7(1), 1-8頁
- 小宮山要 1977「時間的展望の心理学」『青年心理』1, 68-76頁
- 河野莊子 2003『非行の語りと心理療法』ナカニシヤ出版
- Lévinas, E. 1948 Le temps et l'autre, Fata Morgana. 原田佳彦訳『時間と他者』法政大学出版局 1986
- Lewin, K. 1951 Field Theory in Social Science, Harper & Brothers. 猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房 1979
- Main, M., Kaplan, N., Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of repre-

- sentation. I.Bretherton&E.Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, Vol50 (1-2, Serial No.209), pp66-104.
- 真木悠介 1981『時間の比較社会学』岩波書店
- 村田直子 2003「未来展望、充実感及び不安に関する研究」大阪大学人間科学部卒業論文
- 村田直子 2005「統合失調症の時間性に関する臨床心理学的研究—存在構造論の視点から」大阪大学人間科学研究科修士論文
- 村田直子 2007「自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察」『大阪大学教育学年報』13, 55—64頁
- 中村秀吉 1980『時間のパラドックス』中央公論社
- 西田幾多郎 1950『善の研究』岩波書店
- 西澤哲 1999『トラウマの臨床心理学』金剛出版
- 尾崎仁美 1999「青年の将来展望に関する一考察～将来次元の重要性を考慮する意義～」『大阪大学教育学年報』4, 87—99頁
- Reich,W.A.&SiegelH.I. 2002 “Attachment, ego-identity development and exploratory interest in university students”, Asian Journal of Social Psychology, Vol5, pp125-134.
- 斎藤久美子 2007「臨床心理学にとってのアタッチメント研究」数井みゆき・遠藤利彦編著『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房 263—290頁
- Schwing,G. 1940 Ein Weg zur Seele des Geisteskranken, Rascher Verlag, Zurich. 小川信夫・船渡川佐和子訳『精神病者の魂の道』みすず書房 1966
- 四方耀子・増沢高 2001「育ち直りを援助する—情緒障害児短期治療施設でのチームワークによる援助—」『臨床心理学』1 (6), 751—756頁
- 白井利明 1997『時間的展望の生涯発達心理学』勁草書房
- 白井利明 2001『＜希望＞の心理学』講談社
- 杉山成 1994「青年期における未来展望と適応—期待理論によるアプローチ」『立教大学心理学科研究年報』37, 65—75頁
- Teahan,J.E. 1958 “future time perspective, optimism, and academic achievement”, The Journal of Abnormal and Social Psychology, Vol57, pp379-380.
- 都筑学 1984「青年の時間的展望の研究」『大垣女子短期大学研究紀要』19, 57—65頁
- 都筑学 1993「わが国における時間的展望研究の概観」『中央大学教育学論集』35, 57—85頁
- 内海健 2005『精神科臨床とは何か 日々新たなる経験のために』星和書店
- Winnicott,D.W. 1965 The Maturation Processes and the Facilitating Environment, The Hogarth Press Ltd., London. 牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社 1977
- 吉田昭久・小熊均 1988「Time PerspectiveとPersonalityとの関連Ⅶ—「実存不安」を指標として—」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』37, 107—127頁
- Zimmermann,P. & Becker-Stoll,F. 2002 “Stability of attachment representations during adolescence: The influence of ego-identity status”, Journal of Adolescence, Vol25, No1, pp107-124.

A study on time continuity in terms of the relationship with others —time and others in psychotherapy—

MURATA Naoko

This article reconsiders the mechanism involving our usual experiences regarding the passage of time, and examines the modality of time that is perceived as more essential from the viewpoint of clinical psychology. How is it that a person perceives the progress of time? How is it that a person maintains the state of being “I”? This paper approaches these questions through the concept of time continuity. The conclusion is based on the fact that the presence of other persons has a deep connection with our experience of time. For example, based on Winnicott’s theory, a mother makes a large contribution to the occurrence of her child’s time. The bond we have with another person brings the time with others and the continuity of the existence of self. Moreover, some studies on time perspective reveal that adolescents who have clear time perspectives are able to maintain intimate relationships with their friends.

One of the roles of psychotherapy is the integration of a client’s various experiences in the “here and now” with those of a therapist. Moreover, this is a task based on the relationship between a client and a therapist. An encounter between a client and a therapist provides both with a framework for their experiences of time, and they co-operatively create time continuity in the therapy room. It is these mechanism that constitute the process of transformation for a client.